

フィールドでまなぶ・みんなで作る

# ザンビア南部の農と食と暮らし





フィールドでまなぶ・みんなで考える

# ザンビア南部の農と食と暮らし



上／アリ塚と穀物倉庫。下／アフリカの風景。左ページ／早朝の様子。



## 目次

まえがき…地球研と五百チャールソン	6
1 ザンビアの経験を思い出す	9
きっかけは雑談から	10
ザンビア視察のハイライト	11
暮らしの変化に気づく	14
フィールド経験に汎用性はあるのか	15
人を見て、相互の信頼関係ができて初めて可能な現地調査	16
地球研にいるからこそそのジレンマと新たな自己の発見	19
2 異分野の最先端にふれられるという地球研の強み	23
自然科学者の視点	24
文化人類学者の視点	26
農学者兼ドローン専門家の視点	27

### 3 お土産から見る研究者の振る舞い

大きなカバンのなかには大量の衣類

ズボンの計測方法という文化の違い

進物を渡す作法

31

### 4 食のはなし

ンシマのはなし

ファーストフードから見るザンビア

現地の飲み物

38

41

41

### 5 地球研のことを考える

生まれた研究の種はどうしたら発芽させられるか

「地球研らしさ」と地球研の未来をあらためて考える

43

44

45

あとがきにかえて…アフリカ体験の後日談

48

話し手の紹介

54

五目チャーハン。地球研初代所長の日高敏隆さんが、地球研のあるべき研究像を例えた言葉である。ご飯、調味料、5種類の具材が口の中で混然一体となるのが、五目チャーハンの最大の魅力だと思っている。具材選び、調味料の合わせ方、ご飯の炊き加減、火力、中華鍋の振り具合などによって、五目チャーハンの出来に無限の可能性が秘められているのも面白い。

今回の「フィールドぶらり」の舞台は、半乾燥地のザンビア南部州。五目ならぬ5人の専門分野が異なる研究員が共同調査をおこなった。

ザンビア南部州は、地球研の研究プロジェクト「社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス（2007～2012年）」がフィールド調査を続けてきたところである。そして今回の参加者の1人である宮寄英寿さん（境界農学）は、同じく地球研の研究プロジェクト「砂漠化をめぐる土と人と風（2012年～）」の一環として、現在も継続的な調査を行っている。宮寄さんの先導によって私たちが訪れた地域は、農耕民トンガがメイズの栽培を主におこなっている農村地域であった。

宮寄さんのほかに参加したメンバーは、佐野雅規さん（古気候学）、三村豊さん（建築学）、渡辺一生さん（農学）、そして石山俊（文化人類学）である。佐野さん、三村さん、渡辺さんにとっては初めてのアフリカであった。専門分野が異なる5人がフィールドを共有する楽しさは、同じモノや人々へのまなざしの違いを感じることに、それを現場で共有できることはもちろん、異分野の調査スタイルをじっくりと観察できることもある。

9年来、ザンビア南部州で調査を続けてきた宮寄さんは、若いアシスタント、地域の農民から親しみを込めて「ミヤンザ」と呼ばれている。これが他の参加者にも伝染し、「サノンザ」、「ミムンザ」などと呼び合ったことなどは、フィールドが演出するマジックであったのかもしれない。ちなみに「ワタンザ」、「イシンザ」は、語呂が悪かったようで、

定着することにはなかった。こんな些細なエピソードも、フィールドを共有するには大切なことだと思う。

そんな5人が、地球研という中華鍋の中で、ザンビア南部州の人々の暮らしと農という「ご飯」と一緒に混ぜ合わせられた。さて、どんな五目チャーハンが出来あがるのか。

石山 俊



ザンビアでの集合写真（石山は上段左から3人目）。



アフリカの風景は似ているようで、どこが違う。

①

ザンビアの経験を思い出す

きつかけは雑談から

**三村** ザンビアに向けて2016年10月12日に日本を出発して、10月28日の金曜日に帰ってきました。2週間少し、みなさんと調査をしました。地球研でも初めての試みだったと思います。今回の渡航が決まったのは、佐野さんのお声かけがきっかけですね。なぜアフリカに行こうと思いたったのですか？

**佐野** ぼくの所属は気候適応史プロジェクトで、隣の砂漠化プロジェクトの宮崎さんと研究内容をとまじき話していました。宮崎さんのフィールドはザンビアで、あるとき、「過去の極端現象に人がどう対処したのか、なかなかわからない」と。それなら、ぼくの年輪分析手法「注1」が適用できるのではないかとという話になりました。ならば、いっしょに行って検討してみよう。

**三村** ザンビアに行こうと思ったのはどのタイミングで出てきたのですか？

**佐野** いままでずっとアジアでやってきて、アフリカの気候についてはノータッチだった。ぼくはわりと自然科学系のことをしていたので、もっと人と人との接しあいが必要なプロジェクトでは、実際にどういうことをしているのかということに興味をもちました。ザンビアは宮崎さんと話しているときから興味がありました。

**三村** 宮崎さんは、ザンビアについてどういう話をしていたのですか？

**宮崎** 以前調査していたザンビア南部州のある調査村に2016年2月に訪問した。全21世帯のうち7世帯がその前年に離村していました。移住先は未開の地。だれも入植していないのであれば、古くからの植生が残っているはず。佐野さんに古い木のサンプリングを年輪分析手法で調べてもらえばなにかわかるだろうと思いました。

**佐野** それなら、ほかの分野の研究をしている人の智慧も借りようと、三村さん、石山

【注1】  
樹木の年輪パターンを分析することで、年代を特定する方法。

【注2】  
ZARI (Zambia Agriculture Research Institute) : ザンビア農業研究所。ZARIは行政と連携して、農業生産の安定向上について研究を行っている。Moses Mwale 所長と、左から佐野さん、石山さん、宮崎さん。



さん、渡辺さんにも声をかけて意気投合しました。とりあえずの目標は、ザンビアで得た知見をもとに研究シーズを探ること。

### ザンビア視察のハイライト

三村 ザンビア視察は、最初はルサカ近くの農村。13日はZARI (Zambia Agriculture Research Institute) [注2] に行つてあいさつと調査内容について報告しました。

14日には近くのチャワマ (Chawama) マーケット [写真1] へ行き、今後お世話になるマシューさん [注3] に会いました。ほくはアフリカのマーケットを見て、感動しているなか、マシューさん一家が木炭を売っていましたね。

15日はマシューさんの住む村を実際に訪問して、アフリカの農村を初めて見た。

16日には南部州へ一日かけて移動しました。移動時間は5、6時間くらいかかったでしょう。次の日にマシューさんの移住前の村を歩き、ベシヤさん [注4] の家に行きました。18日はアルフレッドさん [注5] の家を中心に、よく歩いた記憶があります。19日はまた別の方に会いに行きます。どなたでしたか？

石山 ベシヤさんのところと、ウイリアムさん [注6] のところ。だから二ヶ所まわりました。

三村 この日は、近くのカリバ湖まで車で移動しました。宮崎さんが「やはり水を見たらアフリカ人は大人でもはしゃぐんだね」と言っていましたね。インドネシアでは、水は資源としてよくある。アクセスができないなかでの喜びのようなものがあつたのかもかもしれません。

[注3]

マシュー (Mathew Moono) さん

宮崎さんが以前調査していた南部州のカネゴ村から2015年7月に現在のムムランド村へ移住した人。カネゴ村ではビレッジヘッドマンを勤めていた (左から2人目)。

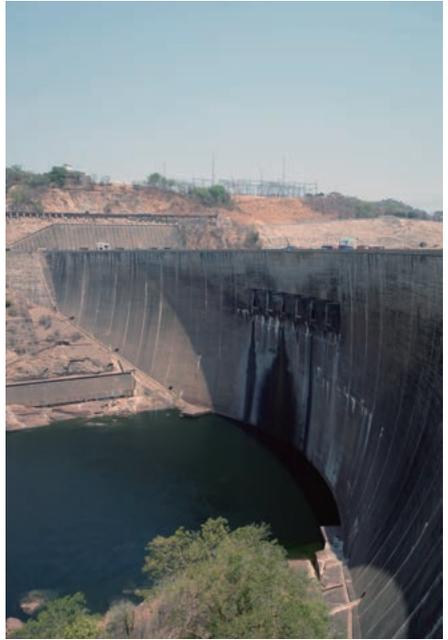


[注4]

ベシヤ (Basir Mwendani) さん

宮崎さんが以前調査していた南部州の農村Aに住む村人。宮崎さんや他のプロジェクトメンバーのリサーチアシスタントも勤めていた。





- 1 / チャワマ (Chawama) マーケット。
- 2 / カリバ湖でテンションが上がるドライバーのポールさん。
- 3 / 穀物倉庫の中のメイズ (トウモロコン) を確認する。
- 4 / ゼンベジ川の中流カリバ峡谷に作られたカリバダム。
- 5 / 航空局での打ち合わせ。

宮寄 たしかにあのテンションの上がりようは、衝撃的でした。ドライバーがパンツ丁になっていました(写真2)。

三村 「ワニがいるから入らない」と最初は言っていたのに。(笑)

宮寄 でも一人がやりだすと、みんなが調子に乗って、水のなかでブリッジとかしていた。

三村 20日は村内でみなさん別行動をしていたと思います。ぼくはアルフレッドさんの家を実測と、穀物倉庫内に、どれだけメイズがあるのかを宮寄さんといっしょに数えました(写真3)。

21日が南部州最終日になり、これも別行動でシアムトルさんの家の実測をしました。22日にルサカへ戻ります。途中、カリバダム(写真4)を見に行つた。シアムトルさんはカリバダムの近くに住んでいて、ダム建設によって居住地を移動した。

宮寄 マシューさんもそうです。マシューさんのお父さんが移住しています。22日までの前半は、マシューさん一家が移住してきた歴史を現在から過去にかけて移動調査してきた感じになります。

三村 23日は現在のマシューさんの家の近くで調査をしました。この地域の調査は、ぼくらが初めてで、顔合わせをすることになりました。前回訪れた15日にセキリタリー(注乙)と会っていて、面識はあったのですが、調査をはじめていいかの許可を得るための謎のミーティングがこの日はありました。待つ時間が長かったです。この日は村泊をして、村人がどういう暮らしをしているかを見てきました。石山さんはこの日に日本に帰られて、到着した渡辺さんが、入れ替わりで参加しました。

24日、ぼくはヤギの解体を初めて見ました。25日は、ドローン(注5)を飛ばすために——ここは航空局になるのでしょうか(写真5)。

渡辺 はい。日本でいうところの航空局です。

〔注5〕  
アルフレッド (Alfred Hanusopai) さん

宮寄さんが以前調査していた南部州の農村Bに住む村人。宮寄さんや他のプロジェクトメンバーのリサーチアシスタントも勤めていた。(左から3人目)



〔注6〕

ウィリアム (William Stampokole) さん  
宮寄さんが以前調査していた南部州の農村Cに住む村人。C村のヒレリジヘッドマンを勤めている。(右から1人目)



三村 渡辺さんからドローンを使う目的の説明があり、日本でのルールなどを説明しました。そして、次の日に飛ばせるようになりました。途中にザンビア大学に寄り、資料探しもしました。26日にドローンを飛ばして、そして27日に帰る。だいたい一連の流れがこうなっております。

## 暮らしの変化に気づく

宮崎 南部州のすべての村で思ったのは、やはり子どもがとでも大きくなっていました。この子はあの子だよね」という人がかなりいた。たまに南部州の村へ行っていたけれど、単発だったので。今年の2月にも行ったのだけれど、1か村につき数時間しか滞在できないような調査でした。今回はだいたいの村を2回ずつ、ほぼ半日ずつ調査するかたちでいろいろな人に会えて思ったのが、「自分は歳をとったな」と。彼らが大きくなっていて、りっぱになっているのを見たらうれしくなりました。

三村 南部州へ向かうとき、宮崎さんが「南部州に行ける」とテンションが上がっていましたね。

宮崎 はい。車のなかでテンションが上がりました。

宮崎 暮らしはあまり変わっていないように思いました。しかし、たとえば携帯を使うなどモノは豊かになっている気がしました。いまでは、村ではスマートフォンでフェイスブックのメッセージが毎日のようにみんなから送られてくる。「まだ雨は降らないよ」とか。携帯で簡単なインタビューはできるようになってきています。行かなくても仕事は進む感じですが、やはり行かないと見えない部分も多いので行きたいです。

【注7】  
ジョージ (George Nganga) キン  
マシューさんが住むウムランド村のピ  
レッジセクレタリー (secretary) を  
務める。

【注8】  
ドローン (drone) とは、遠隔操作  
や自動制御によって飛行できる航空  
機の総称。

南部州に行けるとなるとテンションが上がります。ほくのなかでは3番目の故郷のような感じです。大学時代に通っていた滋賀がちょっとした故郷で、ブルキナファソでも村に入って調査していたので、そこも故郷です。

フィールド経験に汎用性はあるのか

三村 ほくと佐野さん、渡辺さんは、初めてのアフリカでした。アフリカ未経験者をフィールドへ連れて行くことへの不安がありましたか。(笑)

宮崎 いえ。これまで南部州の村々では長期間に渡って滞在して、村人との人間関係はできていたから、調査に関しては問題ないと思っていました[注9]。ただ、ほくと石山さんはずっとアフリカ研究をしていたので、病気に関する知識ももっているし、慣れている。でも、佐野さんや三村さん、渡辺さんが予防注射の話をしているの聞いて、「むかし自分もそうだったな」、「たいへんだったな」と。ああいうことを始めると、不安になるのではないですか。「こんなに注射を打つていけない国なのか」、「こんなに薬を準備して行かなくてはいけない国なのか」と。そのあたりの不安が、忘れていた感覚がよみがえってきました。

三村 石山さんは宮崎さんと同じプロジェクトですが、フィールドは違いますね。

石山 ほくは、もともとサハラ砂漠南部の乾燥地のチャドなどがフィールドです[注10]。地球研では、サハラ砂漠のオアシスが中心です。南部アフリカは行ってみたい、とかねがね思っていました。ザンビアで感じたのは、アフリカの乾燥地帯にも違いがあること。北は乾燥で南が湿潤。そのあいだに広がるサヘル地帯の天水農業北限地に牧畜民と農耕

[注9]

案内人の宮崎は、2007年から現在までザンビア南部州の農村地域の調査を実施している。これまでの主な成果は下記の論文にまとめられている。

MIYAZAKI H., ISHIMOTO Y., YAMASHITA M., TANAKA U. and UMETSU C.: 2016 Coping Behaviors with Extremely Heavy Rainfall in Southern Zambia: Comparison between 2007/08 and 2009/10. VASANTHA KUMAR J., RATHAKRISHNAN T., PHILIP H., MURUGAN P.P. and JAGADESAN M. (ed.) Extension Management Strategies For Sustainable Agriculture Opportunities & Challenges. New India Publishing Agency, New Delhi India, pp.413-427.

MIYAZAKI H., ISHIMOTO Y., TANAKA U. and UMETSU C.: 2013,08 THE ROLE OF THE SWEET POTATO IN THE CROP DIVERSIFICATION OF SMALL-SCALE FARMERS IN SOUTHERN PROVINCE, ZAMBIA. African Study Monographs 34(2):119-137.

民とが重なって分布する地帯がある。両者には、畜産物と穀物とを交換したり、農耕民の家畜を牧畜民に預託したりする関係があります。では、今回の調査地のように、牧畜民がいない土地ではどうなのかです。

三村 なにか見えてきましたか？

石山 じつはまだ答えは出ていないのです。ぼくの調査方法はインタビューですが、今回はいくつかの世帯で家系図を作成することができたので、それと宮崎さんの土壤から気候変動を探る調査とを重ねると、なにか見えると思う。世代が変わると、生業つまり生存戦略がどう変わるのか、とかですね。

三村 アジアをフィールドにする方も参加した。そういう渡辺さんから見ただアフリカは、どのように映りましたか？

渡辺 東南アジアに調査に行くのに注射を打ったことはなかったのに、予防注射をたくさん打ちました。A型肝炎、狂犬病、黄熱病、破傷風……。「アフリカはなんて遠いだろう」と。だからこそ、アジアでの研究手法がアフリカでも使えるかどうか、汎用性があるかどうか興味がありました。

人を見て、相互の信頼関係ができて初めて可能な現地調査

三村 ほかに印象に残っていることはありますか。ぼくは、石山さんの「ペンとノートとカメラしかぼくは持たない」という言葉が印象的でした〔写真6〕。

宮崎 ぼくもできることならペンとノートとカメラだけで行きたい。なにせ、持って行く機材が多い。(笑)

石山 ただ、1回の調査だけではほとんどなにもわかりません。背景や歴史もあります

〔注10〕

石山はこれまで、サヘル地帯と呼ばれるサハラ南縁の乾燥地帯およびサハラ・オアシスで調査を重ねてきた。その主な成果は下記の書籍等にまとめられている。その主な成果は「サヘル環境人類学——内陸国チャドにみる貧困・紛争・砂漠化の構造」、昭和堂（2012）、「環境変動となりわい動態——アフリカ半乾燥地の農耕民クルマシエ」佐藤洋一郎・谷口真人編「イエローベルトの環境史——サヘルからシルクロードへ」、弘文堂（2013）、石山俊・縄田浩志編「ナツメヤシ・アラブのなりわい生態系」2『臨川書店（2013）

からね。やはり調査の生産効率が悪い。佐野さんのように年輪のサンプルを取って、分析できるのは羨ましく思いました。(笑) それに、地球研に来るまでは基本的に一人で調査していたので、手法の異なるみなさんと調査するのはよい刺激になりました。

三村 今回の調査の醍醐味は、それぞれの研究手法が違ったこと。宮崎さんは雨量や土壌の変化を測定していますが、観察しているのは人だという印象を受けた「写真乙」。

宮崎 人を見ないと調査はできません。雨の多いときにどう暮らすか。農作物だけでなく自然植生から採集もします。どちらが本業かわからない状況です。炭を売ったり、木を売ったり、魚を獲ったりと、彼らは複数の生業で生きている。土壌学を捨てたわけではないが、土だけ見てもわからないことが多いと思いますよ。

石山 三村さんの調査でおもしろかったのは、しっかりと測る。歩測とか。メジャーを持って行ったのだと思いますが、とにかく測ること、そしてそれを図に落とすことをされていましたが「写真8」、羨ましいと思いました。その場で調査できる。

宮崎 メイズを一つひとつ数えるのは、やりたくなかった。

石山 人が生きる感覚を自分で捉えるには、ああいう手法は必要だと思います。ふだん日本で年間にコメを何キログラム食べているのかとあまり考えないでしょう。

三村 そうですね。

石山 「測ることに意義がある」というのは名言かもしれません。

三村 ありがとうございます。

宮崎 「しんどいことをすれば、なにかになる」というのは名言だと思います。(笑)

三村 たしかに、「誰もしない大変なことをすることが大事」ということが、自分にとつてなにかを測るうえで信念になっています。ようするに、一見簡単に測れるものでも、意外に大変だとわかるとみんな避ける。でもじつはそこに大事なことが隠されている可



6



8



7



9

- 6 / ペンとノートとカメラを持って、アリ塚を観察する石山さん。
- 7 / 聞き取り調査を行う宮崎さん。
- 8 / 穀物倉庫のスケッチ。ノートには部材名称を聞き取り、記述する。
- 9 / 穀物倉庫からメイズをすべて出した様子。

能性があると思います。

宮崎 数えるまえは面倒だったけれど、楽しかったです。なんだかんだみんなも協力してくれましたし「写真9」。

石山 いずれにしろ測るということは大事なことなのだなと思いました。

佐野 そういえば、宮崎さんの現地の人たちとの距離感がよかったですね。英語のイントネーションが関西弁。(笑)

宮崎 そうでしたか。(笑)

佐野 人を相手にするフィールドでは、人と近すぎててもやりにくいし、遠すぎててもよくない。宮崎さんは、ぼくらの要望に応えつつ、現地の人とうまく橋渡ししてくれた。絶妙な立ち位置でしたね。

三村 宮崎さんがZARI(ザンビア農業研究所)のMoses Mwale 所長とフランクに話をしているのには驚きました。

石山 大阪人、恐るべしです。(笑) アフリカの人とのうまい付き合い方を、現地で体で覚えてきたのだと思う。組織については、地球研が現地の人といい関係をつくってきたことが大きい。個人で行っても所長には会えない。地球研が積み重ねてきた成果の一つでしょう。

## 地球研にいるからこそそのジレンマと新たな自己の発見

渡辺 佐野さんの調査を見ていておもしろかったのは、現地で案内をするマシューさんと話しながら、どの木をサンプリングするかを決めていたこと。佐野さんが硬さやサイ

ズ、用途を質問して、マシューさんと相談しながら木を決める。

**佐野** 炭焼きを生業にするマシューさんは、葉を見ずとも幹や樹皮だけで木の種類がわかる。どういう道具をつくるのに最適な木かも、木の成長速度も感覚的にわかっていて。そういう話を聞きつつの作業でした。調査の対象となるのが人ではなく、木です。そしてがんばればがんばるほど成果が出る。

**三村** そうですよ。

**佐野** でも調査だけをしてしまうと、人間関係がぜんぜん築けない。

**石山** 佐野さんは現地でいっしょに成長錐〔注11〕を使って、みんなでおもしろがって年輪調査をしたではないですか〔写真10〕。

**三村** あれは羨ましかったです。

**石山** 共有できるツールだなと思いました。

**三村** 子どももできるし。

**石山** データを解析したあとにアフリカに行くチャンスがあれば、「こんなのだったんだよ」ということが報告できる。それができればすごくおもしろいと思います。共有ツールは分野や人の方法によって違うと思うけど、みんななかしらあるのでは。

**三村** 成果のフィードバックは大事ですね。

**石山** ぼくは人の話を聞くのが基本ですが、興味の対象は場所ごとに変わる。世界各地の年輪を調べている佐野さんは、サンプリング以外に興味はないのですか。(笑)

**佐野** いまの自分の研究はおもしろいですが、地球研にはこれだけの分野の研究者がいて、しかも多様な場所に行く機会がある。現地の人との関わりもある。もともと人とかかわりたい、違う方向性の研究にも取り組んでいきたいという思いは今回出てきましたね。  
**石山** その好奇心は、地球研の人たちと話すことで増幅すると思いますよ。佐野さんが

〔注11〕

中空のドリルを木の幹に挿入し、太さ5ミリあるいは12ミリの細長い棒状のサンプルを抽出する道具。サンプルの年輪を数えると樹齢がわかる。



10 / 調査補助のジェームズさんが成長錐を使って、年輪を採取する。



11 / マッシュー家の暮らしを聞きとる。

多くの調査で得た家系図をずっと見ていたから、関心のあることはひしひしと伝わってききました「写真11」。ご自身の専門とのジレンマがあるのだなど。

**佐野** 自分の分野の幅を押し拡げたいですね。渡辺さんのように、木がどれくらい成長するかを上空からも観察したい。

**石山** 自分でもできるようにしたいと。

**佐野** そう、自分でできるようにもなりたいし、ほかの人の研究と組み合わせで新たな研究につなぐことができたからね。今回は新たな調査方法を見ることで新しいアイデアが浮かんで、それがすごく楽しかった。

**石山** ぼくもそうでした。

**渡辺** 専門の異なる人と同じフィールドに行くからこそそのアイデアがありますよね。

2

異分野の最先端にふれられるという地球研の強み

## 自然科学者の視点

三村 ルサカ州近くの農村と南部州の農村へ行きましたが、実際に見比べてどうでしたか？

佐野 宮崎さんが調査していた地域の方が南部州からルサカ州近くの農村へ移住しましたよね。なぜ移住したのかいうところが疑問でした。たしかに南の地域のマシューさんがまえに住んでいたところは、山の起伏が大変なところだった写真<sup>12</sup>。北のほうに行けば行くほど雨が増えて、そのぶん収量も上がるという期待のもとで北のほうへ行ったのだと思います。現在はわりと地形がフラットなところ「写真<sup>13</sup>」なので、すでにある農地で作物を耕しつつ、開墾していこうかというのはあつたと思います。

三村 たとえば、木の硬さに違いはありますか？

佐野 ぱつと見た感じでは、大きく植生が変わることはないように思います。ほくはそんなに詳しくはわからないですが、大きな流れや、違いは見た感じでは変わらないように思います。最初はなるべく古い木があればよいかと思っていました。見たところが村の中と裏山みたいなどろだけだったので、すでにもう手を入れられていた林だったので、そんなに古いものもないのかなという気がしました。

ただ車で走っていて、景観として木が見えるのですが、そんなに古そうな木もないので、そのサイクルとしてある程度の期間が経ったら死んでしまって、新しい木が生えてくるとい感じの植生だと思います。



12 / カネゴ (Kanego) 村の旧マシュー家の様子。



13 / ムワムランド (Mwamuland) 村のマシュー家の様子。

## 文化人類学者の視点

宮崎 今回の短かったなかで、インタビューを主にして調査する石山さんはしんどいだろうと思っていました。自分もそういうことを経験していますから。現地に行って「はじめまして」と言って、家の話を聞いても誰も答えてくれないのはわかっているのに、しんどいのは石山さんだろうと思って。

石山 いちばんわかりやすいのが家系図です。

三村 すぐに聞いて記録できるから。

石山 それだけでデータとして充分であるならそれでもよいです。

宮崎 うらやましいです。

石山 ほくが家系図を聞いているときに佐野さんがじっと見ていてくれました。「こんなものを見ていておもしろいのかな」と思いながら見ていました。

佐野 いや、すぐおもしろかったです。

三村 書き方がありますよね。男性、女性がわかるとか。年齢とか。

宮崎 ほくはあれができません。1、2、3、4とふってゆくだけ。あとで人に書いてもらえばよいかと。

石山 いちばんおもしろかったのは、母系。母系というけれど、それが出てきてわかったのは、「くれくれおじさん」のところの。

宮崎 ウイリアムさん。

石山 そう。ヘッドマンの継承。ヘッドマンが母方から継承されているのだなということくらいしか、ほくは母系については確認できませんでした。

宮崎 ヘッドマンを継承するのは、母系が多い。子どもたちはすべてお母さんのムゴワ

〔※注12〕を継いでいる。

三村 石山さんに「ずっとインタビューをしてしんどくないですか。いつもこんな感じですか。ずっと話しているのですか」と聞いたら、「一緒に座って、ぼーっとしているときのほうが多いよ」と言っていたことです。これは衝撃なのですよ、ぼくからすると。調査中は「なにかを測らなきゃ」と考えてしまう。「無駄な時間を共有するのが、インタビューだ」と言っていましたね「写真14」。

石山 そんなこと言いましたか。覚えていません。(笑)

三村 「座って、ぼーっとしている。なにも話さないときのほうが、じつは一日のなかで長い」と言っていました。「でも一緒にいる」と言っていました。

石山 それは調査において助走みたいなものでしょう。

三村 いま思うと、成果はほとんど手に入らない。家系図にしたってそうです。石山さんの調査は時間をかけてする。

石山 かかってしまうね。調べるものによるけれど、とくに生活の変化とか、人の話を聞く場合は、とにかく一緒にいるのが不自然ではないくらいにはならないといけない。宮崎さんのように長年入って地域の人に溶けこむくらいにはなれないけれど、……その雰囲気をつくってゆく。「こいつはよくわからないけれど、こいつには話してもよいかな」くらいの存在になることはつねに意識していると思います。

## 農学者兼ドローン専門家の視点

渡辺 ぼくは、みんなより滞在期間が短くて、ドローンを飛ばせるかどうかだけだった。

〔注12〕

△ムフ (mukowa)

トンガ語で親族集団を意味し、ウシ、サル、ヤギ、ウサギなどの動物や、カボチャの種植物関連の名がある。母系制の社会システムをとるトンガでは、子供は母親のムゴワを継承する。

(笑) それでも複雑な手続きなど、簡単ではなかった。

宮崎 天候の問題もありましたしね。

石山 朝には風も結構あったものね。

渡辺 とりあえずドローンによる調査が自分の目的で、あとはみんなの調査の観察。

三村 飛行時間は何分でしたか？

渡辺 最初に村を撮影したのが2、3分間。そのあと、切り開かれた農地の上空を15分間くらい。たった20分間のフライトのために、往復50時間。(笑)

宮崎 ドローンで撮影した映像はすごかった。できあがりにほくは感動しました「写真15」。

渡辺 現地でも「これはあかん、反則だ」と言っていましたね。(笑)

宮崎 あんなに鮮明に撮影できるなら、上空からなんでも計測できそうだと……。

渡辺 自分の調査に、ちがうアプローチが一つ加わるといっきに視野が広がる。

三村 それが地球研にいるよさですよ。分野の最先端を理解している人に、あたりまえのごとくその技術を見せてもらえる。渡辺さん以外の人にドローンで撮ってもらっても、フィールドワークへの応用に最適な高度60〜100メートルから撮影する意義は理解できなかったかもしれない。

渡辺 ほくは自分自身がフィールドワークをするので、映像の最適な解像度を経験的に知っている。その差はあると思います。



14 / ゆっくり時間をかけて、丁寧にインタビューを行う。ときには雑談を交えながら談笑する。



15 / ドローンで撮影したマシュー家の様子。



調査用の木の選定は、現地の方と話しながら決めていく。

3

お土産から見る研究者の振る舞い

## 大きなカバンのなかには大量の衣類

三村 そういえば宮寄さんのお土産はすごかったですね。大きいカバンには古着を大量に詰めて。宮寄さんのものだけではなく、知り合いの方から衣類をかき集めて、それを渡す。ぼくはこれまでしてこなかったので、新鮮でした。やはり驚きました。

宮寄 古着は喜ばれます。日本の人から、衣類は捨てにくいので、アフリカに持って行くと言うとみんなけっこう出してくれる。

三村 インドネシアではドーナツツとかが喜ばれます。

渡辺 服については、インドネシアではもう普通に余っているから、逆にどこかあげたいくらいのもものになっている。たとえば日本の食べものやお菓子は逆に喜ばれるので、だいたい甘いお菓子を持って行きます。

三村 ちなみに石山さんや佐野さんはお土産としてなにを持って行きますか？

佐野 マシューさんから「ノコギリをくれ」と言われました。少し人里から離れたところではなかなか買いたいものに行けない。そのため裏山から採って、木を使ってなにかをこしらえたりする。そういう意味ではノコギリがあるなら「これがほしい」という感じになります。とくに持つて行くというよりも、「いつしよに調査を手伝ってくれてありがとう」という感じで渡します【写真16】。

三村 いいですね。自分で使って、それを見せているから相手もわかって、それが贈りものになる。

渡辺 ノコギリを調査に使って、マシューさんがノコギリを持った瞬間にすごくテンションが上がっていました。とり憑かれたように「これはすごい」となっていました。そういうお土産はやはり効くなと思いました。ぼくもまめに釣り針をお願いされたこと



【写真16】  
ノコギリを使用して、サンプルを採取する。

がありました。行くまえにその村人のところでお世話になっていて、「次にくるときには日本の釣り針をもってきてほしい」というリクエストがあったので、それを持って行きました。覚えていたのがむこうとしてはうれしかったようで、「ありがとう」と言ってくれました。日本のものはやはり硬さが違うと話していました。

三村 生活の一部というか、使うものが相手にフィットするといい。

渡辺 フィットすると、「たしかにノコギリっていいよな」という感じになります。でも自分でノコギリは調査でつかわない。(笑)

佐野 ぼくが少し気になったのは、生業ともかかわっていて、ノコギリで木を切るではないですか。今回はノコギリ一本だったので、それほど激しくはないけれど、たとえば今回チェーンソーを買おうかという話になりました。

三村 現地で確認したところ、値段は安くて8000円くらいでしたね。

佐野 でもあれを買って置いていたら、たくさん木を切り倒すことにもなりかねない。  
三村 それは問題です。

佐野 あまり外部から調査に入って、いろいろと置いていたりすると、一時的にはよいのかもしれない。でもそのなかで、まわりの人は持っていないけれど、自分は持っているとか、そもそも森林を切ってしまうとか、そういう軋轢が生じるかもしれない。そこは考えなくてはいけません。

三村 難しいですよ。技術革新が地域で起こってしまう。あのノコギリですらそうかもしれない。渡したあとどのようになるかはわかりません。石山さんはどうですか。

石山 アフリカにはあまり持って行きません。

三村 日本だと、お菓子を持って行ったりするのですか？

石山 日本だと持っていくます。ぼくはあまりアフリカにはお土産を持って行かないで

す。

宮崎 一緒にアフリカへ行ったときびっくりした。「なんにもお土産を持ってきていない」と思いました。

石山 あれはアルジェリアだったからかな。ただ、今回はびっちり3家族につくという感じではなかったので、持って行きあぐねるところはありました。アシスタントをしてくれる人には、なにかを持って行くことはあります。そんなにたくさんは持って行きません。

宮崎 今回は調査に入る村の数が多かったですから。以前のプロジェクトではアシスタントをけっこうつかっていましたから、彼らに。

石山 たまに「車を送ってくれ」といわれることもあります。それは無理。(笑)

### ズボンの計測方法という文化の違い

三村 そういえば、おみやげで、洋服のズボンの測り方が特徴的でした。手の甲から肘までの長さがウエストサイズというのがザンビア人の測り方だそうです【写真17】。

渡辺 へえ。それはみんな痩せていることが前提ですか。

宮崎 太っていても同じです。

渡辺 いや、それは違うでしょう。(笑) 太っている人でもそうなのですか？

宮崎 みんなサイズが合っていました。

三村 いろいろなサイズのズボンがあるから、みんな自分で測っていた。

宮崎 ぼくの場合は首まわりで測る。



【写真17】  
ウエストサイズの確認は、「手の甲から肘までの長さ」がザンビア流。

三村 それも衝撃でした。

渡辺 知らなかった。

宮寄 それをザンビア人にやらせたら少しずれる。(笑)

三村 そうそう。

宮寄 ぼくらがすると、少し小さくなる。ぼくらの手の甲から肘までの尺が彼らよりも少し短いのでしょうか。

三村 どちらで測るのが良いのか、確認したのがおもしろかった。

宮寄 ぼくの場合は首でした。ボタンを留めて、首に回して、少し余ったらウエストと同じくらいになる。

石山 ウエストが首の倍ということですか？

宮寄 そうです。全体的に太ってゆく。

三村 こっちのほうがなんとなくわかる気がします。手の甲から肘までの尺は太っても伸びないし。文化というか、お土産をあげることで違いが見えたのはおもしろかった。

## 進物を渡す作法

三村 宮寄さんのお土産の渡し方がよかった。チェアマンと会った時です〔写真18〕。調査の許可を得るための重要な日でしたね。

宮寄 膝をついて。

三村 そう、宮寄さんが膝をついて、なんと言っていたのかは思い出せませんが。

渡辺 あれは正式なものでですか？



〔写真18〕  
進物を渡す様子。

宮崎 わからないです。正式なものではないかもしれませんが。

渡辺 でも、ほかの人もそういう渡し方をしていました。

宮崎 だいたい膝はついておかないといけない。目上の人にはそうする。

三村 それがいいにも・・

宮崎 左手を肘に添えて。

三村 きちんと下から上に捧げていた。チエアマンはあまり話さない方でした。でもこの礼儀というか、作法をまちがえすると、たぶんだめだと思えます。

宮崎 はい。あまりなにも考えませんでした。ザンビアでは偉い人にそうしないといけないと思います。

4

食のはなし

## ンシマのはなし

石山 ぼくが行ったところはソルガムやミレットというアフリカ起源の穀物が主食になっている。メイズ（トウモロコシ）の味もけっこう入ってきているのですが、とくに今回の調査地では、ほぼメイズが主食ではないですか。それは歴史的な経緯などがあるのだけれど、そういうところでいろいろの違いがあるのかな。

三村 ぼくは1日だけンシマの固まりを三つ食べました。（笑）

宮崎 やりました。（笑）

三村 やりましたというの感覚があったので、自信がついているところがあります。主食のンシマ。ザンビアの食べ物、いちばんおいしかったものがあればなにか。

石山 西アフリカとの違いでいえば、やはり田舎にきたからそうだなと思ったのは、つけるものが、ソースやスープのようなものでした。オクラでとろみがついたものです。どちらかというとンシマの場合は、ちぎって野菜と少し合わせて食べるのが違いです。

三村 ザンビアだけが、ちぎって食べるのですか？

石山 両方ちぎるけど、スーダンやブルキナファソなど西アフリカの場合は、とってスープにポトンとつけたみたいな感じです。意外とンシマとの組み合わせはおいしい。

三村 ぼくらはメイズ、キャッサバ、ソルガムの3種類のンシマを食べた。キャッサバはルサカ市内のパパレストランで、そして、ソルガムはベシヤさんの家で食べました。メイズはどこどこで食べていた「写真19」。

佐野 ソルガムは甘くて、村で食べさせてもらったものが総じておいしかった。ホテルのメイズ「写真20」のンシマは粉の量が少なく、水が多かったので味と食感がちがいました。

三村 たしかに味が違いました。

「写真19」  
主食のンシマ。（皿右）



「写真20」  
ホテルのンシマ。



佐野 村で出しているものが、食感がよくておいしかったです。

石山 でも食感は地域によって違うね。東とか西とかおおざっぱに。ザンビアはかなり硬めだった。

佐野 そうですね。

三村 ソルガムはヨモギのような味で、少しメイズより味がするという認識でよいですよね。

石山 くせといえばくせです。

三村 忘れてしまったけれど、キャッサバは……。

宮寄 もちもちしていて、少し甘めです。

渡辺 イモっぽいんです。キャッサバは東南アジアでも食べられますので。

石山 ソルガムは毎日食べていると、じつは飽きるんだよね。

宮寄 やっぱり、ンシマがおいしいのかな。おかずより、村のンシマ。

渡辺 そう、あらびきのものがうまいというのがわかりました。違いがわかった。ホテルのは少しいただけないと。

宮寄 そうでしょう。ほくもホテルのンシマは嫌いです。だから着いた日に、晩ご飯でンシマを食べなかったでしょう。ホテルでは食べないことに決めていましたから。

三村 そうでしたね。

宮寄 ホテルでみんなが意外と「ンシマいいじゃん」と言っていたので、これは村に行ったら100%喜ぶだろうと思いい、自信がつかまりました。絶対に村のほうがおいしいから。食事が合わないと調査に支障が出ますし、ザンビアが嫌になっちゃいます。

渡辺 みんな食べる量が多い……。 (笑) ほくだけ食べられる量が少なかった。

宮寄 村でもいわれていましたね。(笑)

渡辺 意外とお腹がすぐにいっぱいになる。

三村 そうですね。お腹がいっぱいになった。子どもはどのくらい食べますか？

宮崎 2つは食べると思います。食べる人は3つ食べるのだと思います。

三村 たくさん食べる子どもはいると。

宮崎 普段、彼らはあまりおかずを食べませんから。ぼくたちの場合は久しぶりの訪問でいいおかずが出てきましたから。

三村 鶏肉と野菜と、だいたい肉がついてきました。お客さんでしたね。

石山 あと、彼らはあまりお茶を飲まないです。

三村 そうでした。

宮崎 おもに水です。

石山 西アフリカとかスーダンの定番は甘いお茶をいれる。「おれたちは砂糖入りのお茶を飲んでいるのか、お茶入りの砂糖を飲んでいるのか」というくらい甘い。

三村 砂糖は高価ですか？

宮崎 村の人はあまり砂糖をもっていないと思います。だからほしがるでしょう。ぼくたちがチエアマンの家に行くときに、洗濯洗剤と砂糖を持って行きましたよね。貴重品はそういうところにも使える。

佐野 商店ではこんな小さい袋に分けて売っていました。

石山 けっこう小袋に分けて、小さいお店で売るのがアフリカでは定番です。

宮崎 貧乏人がどんどん貧乏になってゆく。割高で売っていますから。

石山 みんなまとめ買いをしません。



〔写真21〕  
チップスを頬張る三村さん。

## ファーストフードから見るザンビア

宮崎 食べものでいうと、三村さんはチップスが大好きだなと思っていました。とりあえずポテトという感じでした。(笑) インド料理屋でポテトを頼んでいたのは驚きました。渡辺 ふだんのフィールドがどこかそれでわかる。(笑)

三村 ドライブスルーでチップスを食べるとき、みんなお腹いっぱいといっていました。が、ぼくは大丈夫でした「写真21」。

石山 あれだけファーストフードの店やチップスがあるのは、いままで訪れたアフリカの中ではザンビアが初めてです。

宮崎 ぼくもあまり見ません。

石山 あまりファーストフード店を見ません。スーパーマーケットとか。

宮崎 ザンビアはそれなりに豊かなのかもしれない。

石山 海外からの資本が多くきている。

## 現地の飲み物

渡辺 この写真はお酒ですか。牛乳パックみたいなもので売っていて「写真22」。

宮崎 チブクというお酒です。

三村 原料はなんでしょうか？

宮崎 雑穀とメイズのブレンドです。

三村 あともう1個、次の日に飲んだこの飲み物の原料はなんですか「写真23」。

「写真22」  
チブク (Chibuku)。ザンビアの伝統的なお酒。



「写真23」  
チフワントウ (Chiwantu)。トウモロコシと原野に自生するの木の根を原料とする発酵飲料。



宮寄 これはメイブです。

三村 名前はなんというのでしたっけ。

宮寄 チブワントゥです。これは、農作業の合間やお客さんが来た時に、もてなしに出すものです。

三村 お客さん用なのですか？

渡辺 でも村の人はこれで朝ご飯を食べると言っていました。

宮寄 食べる時もありますね。ただ、カリバ湖側エリアだとあまり飲まない。ベシヤさんのところだと、これに使う木の根っこが手に入らない。

三村 マシューさんの家でも出てきましたよね。

宮寄 そうですね。あそこに移って潤沢になったということだと思います。

三村 そういう見方ができるのですか。

渡辺 これが飲めるということは、ある意味食料として豊かだということですか？

宮寄 だってこれを飲もうとしたら砂糖がいる。

三村 ああ、そうか。

宮寄 1日めは砂糖が入っていなかったでしょう。そうしたらジョン[注13]が買いに行つた。1キログラム買ってあげたでしょう。ジョンも砂糖入りで飲みたいし。

渡辺 ジョンさんのところも奥さんの実家は、これを飲む風習があったと思います。好きだから、これをペットボトルに入れて持って帰りたいと。

宮寄 ジョンの奥さんはトンガ出身です。民族が一緒なのでこれを飲みます。

渡辺 朝食もこれしか飲まないし、いつもこれだと言っていました。



[注13]  
ジョン (John Banda) 氏は  
ZARI に所属する Agricultural  
Research Officer。土壌学および  
リモートセンシングを専門とする。  
(左)

5

地球研のことを考える

生まれた研究の種はどうしたら発芽させられるか

石山 今回の調査は自然発生型のメンバーだったのがよかったと思う。「こういう分野の人がいたら収穫が多いかも」と宮壽さんと佐野さんがメンバーを選んだ。それが楽しさのゆえんにもなったと思う。

宮壽 シーズ探しが目的だったので、成果を上げる制約がなかったのもよかった。研究プロジェクトとなると、課題に沿った話がある程度考えなくてはならない。道すがら、ごちゃごちゃ言いあって、「これをしたらおもしろいのではないか」などのアイデアが次つぎに出る楽しみがあったな。

佐野 研究プロジェクトのよさは、最初からみんなの進むべきフォーカスが合っていて、自分の役割が決まっていること。互いの能力を補完できると、合意形成するなかで各人がなにをすべきかが詰まってゆく。今回は、みんなの研究のおおまかなバックグラウンドは知っていたが、具体的な引き出しはわかっていなかった。実際にはかの人の調査方法を見ながら、「こういうことはできるかな」「そういうこともできるね」と確認しながら進めたのがよかった。時間の制約がないのも大きかったね。

渡辺 プロジェクトは個人の専門性が求められる。それぞれの持ち味をいかに発揮して出てきたデータを、プロジェクトの目的と評価の枠にあてはめてどう料理するかはプロジェクトリーダーの仕事です。では、プロジェクトに属するメンバーが、プロジェクトの枠組みから離れて地球研に属する一人の研究者として共同研究を始めるとどうなるのか。今回は、そういうトライアルの一つとして位置づけられると思います。そういうプロジェクトを離れた試みに、地球研が研究費を出し、新しいプロジェクトの種を蒔く。このようなことをサポートしてくれる地球研はとて素晴らしいと思います。なん

とか花開かせたいですね。

石山 プロジェクトにはプロジェクトの設計がある。ほくもそう思います。自由にするとすると、ほくたちの創造力が問われるでしょう。これまでのプロジェクトと異なるなにかができるのか。それをきっちり意識する必要がある。無理にでも次のアウトプットや展開を考えるとかね。腕試しではないが、具体的なものを考える必要がある。

渡辺 具体的な研究にするのですか？

石山 そうです。種は蒔いたのだから、発芽させないと。実をつけるまでやってみる。そこを意識しないと、ただのシーズで終わっただけではどうにもならない。

渡辺 地球研がこれまでしてこなかったことですね。いまは、「予算をつけるからなにかを考えてください」と、外部から企画を公募している。

石山 地球研の体制でできるかもしれませんし、外部資金を獲得する方向かもしれません。でも、「せっかく種蒔きをしたのだから、もう少し育てよう」という動きを、地球研全体でもっと共有したいと感じます。

「地球研らしさ」と地球研の未来をあらためて考える

宮崎 「地球研らしさ」で考えると、地球研にプロジェクトとして申請しないといけない。「とりあえず種を見つけたのでしよう」、「では地球研に応募しなさい」という話になると思うのですが、どうでしょう。

三村 出したいという希望はありますか？

宮崎 今回の材料だけでは通らないと思う。プロジェクトのように何十人も研究者を集

めて実施する調査でもないし、エリアを拡大して比較しても大きな研究にはならない。残念ながら、地球研の研究プロジェクトよりも少ない外部資金のほうで行くべきかなと。「よいシーズを地球研に見つけた」という感じ。地球研で予算をとるならサブプロジェクトというか、金額の少ない小規模なプロジェクトの枠がないと。

渡辺 外部資金でもよいが、これまでにないプロジェクトの立ち上げができそう。

三村 そうですよ。

渡辺 横をつなぐサブプロジェクトみたいなものができたらよい。

佐野 アフリカの自由な環境で、いくつか方向性は見えてきたと思う。

三村 地球研の大きな柱である研究プロジェクトがある一方で、スピノフ的な研究もどんどん出てゆけば……。研究プロジェクトから生まれる本筋になりにくいニッチな研究、しかし重要な研究があるはずです。

プロジェクト形式は外部の研究をセレクトするので、やはり特殊。そことはちがうかたちで、地球研らしさを出したい。そういう新たな制度ができれば、地球研自体の活動の幅も広がると思いますね。今回の調査は、そんなことを言わせるくらい、ぼくは楽しかった。文理融合をあたりまえとして意識しているし、あたりまえのように相手から学ぼうとするのは、まさしく地球研の特徴ですね。そのよさを活かせる新しい制度を考えたいですね。



スケッチに興味を持つ子供たち。

隻眼の彼は、杖を持ってゆっくり近づいて来た。先に着いた私は、彼が帰って来るのを待っていた。

「…やざーき、…みやざーき…」と調査パートナーのラザくんが彼に説明している。現地語がわからない私でも、宮崎さんの名前を言っていることはわかる。会話の内容は実測調査の承諾である。彼は笑顔で承諾してくれた。彼と私は、今日初めて会う。とくに問題なく承諾を得られたのは、宮崎さんがこれまで築き上げた現地での信頼関係があったからだろう。

この日は、他の研究員と別行動をしていた。ザンビアでの調査は短い時間であったが、彼の家で見ただきな穀物倉庫はこれまで見たことない。実測したいと宮崎さんに懇願して、別行動を許してもらった。

「彼は写真を嫌がると思うから撮らない方がいいよ」

「調査は慎重にやってね」と宮崎さんは言う。

「なぜですか？」と私は聞く。

\*

10月29日、その日は少し寒かったが、アフリカと日本の気温差からだと思っていた。今日は休日ということ、アフリカから帰国して翌日ということで、家でゴロゴロしていた。お腹が空いたためコンビニへ向かう。15時くらいだろうか。朝から何も食べていないがよくあることだ。自転車に乗って、コンビニへ向かう途中、舗装された道路や真新

しいマンション、きれいな車などを見て、

「日本に帰ってきたんだな」とアフリカでの経験を思い出す。

コンビニに到着すると、なぜか食欲がない。さて、何を買おうか。日本に帰ってきたんだし、せっかくだから、など考えたが、から揚げのみ買って、家路に着く。家から揚げを食べ、再度寝た。17時ごろ起きる。今日は寝すぎた。体が重い。

事態は急変する。頭が痛い。トイレの往復が増える。熱があることを実感する。23時ごろだろうか。どこにしまったか忘れた体温計を探す。39・1度。

「あー。これはマラリアか」と思う。と、同時にトイレへ向かう。身体中が痛い。そして寒い。歩くのがしんどい。救急車を呼んで病院へ行くか。いや、明日の朝まで我慢しよう。寝れば大丈夫だろう。

翌日の朝5時ごろ。あまりにもしんどいため、タクシーで病院へ向かう。京都市立病院はマラリアの診療実績がある。石山さんから聞いたことだ。タクシーでの支払いで、10円まけてくれた。病院の受付ロビーを見渡すと4名ほど長椅子に座っていた。一人10分だとして、40分待ちかと思う。

長椅子で横になつてみると、「三村さん」と看護師の声が聞こえた。診察室に入る。

「どうぞ」と30代くらいの医師が言う。

「どうぞされましたか？」

ザンビアへ出張していたこと、熱があること、下痢がひどいことを伝える。医師の診察からマラリアではなさそうだった。その後、採血、尿、鼻腔拭い、検便を行う。マラリアだけでなく赤痢、インフルエンザなど、さまざまな角度から症状の特定を行うという。脱水症状を懸念して、点滴を40分ほど行った。点滴中、別の医師が質問に来る。

「アフリカで性行為はありましたか」

後日知ったことだが、性行为で感染する寄生虫は、赤痢アメーバや大腸アメーバなどある。タクシーで帰る途中、ふと思う。

「マラリアじゃないなら、原因はなんだろう」

……「なぜですか？」と私は聞く。

「彼はウィッチクラフトだから」と宮寄さんは言う。

「アフリカにはいるんだよね。ウィッチクラフト。魔術をかけるんですよ」とすかさず、石山さんが付け加える。

「ええやん。調査やったら」と佐野さんは他人事のようだ。

「やめたほうがいいですかね」と確認した。

「問題ないでしょ」と言う宮寄さんの言葉を聞いて安心する。実測したい、好奇心でウィッチクラフトに会いたいと思い、調査を決意した。

\*

10月31日、感染症内科で診察する。昨日までの症状を淡々と伝え、帰国後から揚げを食べたことを追加で伝える。

「から揚げなんて食べたの。体調悪いのにな？」

医師のこの言葉だけ、鮮明に記憶している。検査結果はマラリアではなかった。では、何か。まだわからない。他の感染症の検査をするので、早くとも2、3日はかかると。また、

採血、尿検査を行った。熱は37・5度くらいあった。

「報告の義務がある感染症の可能性があるので家で待機しててください」といわれた。

11月1日、症状は良くなってきた。熱は変わらないが、薬が効いているのか、気持ちいが楽だった。日をまたぐごとに、さらに良くなっていつていることがわかる。少しほっとする。

11月4日、検査結果を聞くため病院へ向かう。結果はカンピロバクター。カンピロバクターは多くの動物が保菌し、鶏由来だろうといわれる。日本にも存在する細菌。

「え。コンビニのから揚げですか」と聞くが、

「たぶんアフリカでしようね」という。

その後、症状はよくなり無事に発熱と下痢は治る。

が、11月6日、再度38度の熱が出る。咳が止まらない。12月末まで、この咳はつづいた。採血やレントゲン検査を行ったが原因は不明である。

無事に回復した 三村 豊

## 謝辞

本プロジェクトは、総合地球環境学研究所・実践プログラム3（生活圏）、平成28年度所長裁量経費・研究支援充実経費、および科研費 基盤研究（B）『アフリカ・アジア熱帯乾燥地における極端気候下の生業戦略と現代の特徴の地域間比較（研究代表者：石山俊）』の研究助成を受けて実施された。

現地での調査を円滑に進めるための補助をしてくれたジェームスさん、ラザルスさん、チムニャさん、ジョンさんにはこの場を借りて、お礼申し上げます。

最後になりましたが、われわれの訪問を快く受け入れてくれた、マシューさん、ベシヤさん、アルフレッドさん、ウイリアムさん、ジョージさんおよび村の方々には深く感謝したい。



フィールドワークに付き合う子供たち。

1 研…砂漠化をめぐる風と人と土プロジェクト（代表…田中樹）

石山 俊

文化人類学、環境人類学（アフロ、ユーラシア乾燥地域研究）

NGOによる砂漠化対処活動現地駐在員としてアフリカ、チャドで4年間を過ごす。後、アフリカ乾燥地にて、農業を中心とした生業活動とその現代的変容をテーマにしたフィールドワークと研究を開始。福井県中山間地への移住経験をきっかけに、「篤農家」の研究にも着手した。

宮壽英寿（案内人）

学生時代は西アフリカ、ブルキナファソで牧畜民と農耕民の共存関係に関する調査をおこなう。その後、南部アフリカ、ザンビアで小規模農民の気候変動に対するレジリアンスについての研究を5年間おこなった。現在は、インド、北西部、ラージヤスターン州・南インド、タミルナードゥ州・ブルキナファソ、北部、サヘル州にて家畜糞を介した牧農共存のあり方に関する研究および、ザンビア、南部州で雑穀栽培のリバイバルをテーマとした研究に取り組んでいる。

2 研…高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索（代表…中塚武）  
佐野雅規

古気候学樹木の年輪から環境の変化を読み取る研究に従事する。主に東南アジアやヒマラヤなどのモンsoon地域を対象とし、人里離れた手つかずの森林から老齢木のサンブルを集めてきて、その年輪の厚さや材密度、同位体比を測ることで気温や降水量がどのように変化してきたのかを調べてきた。最近はその日本の気候の変化を過去数千年間にわたって詳らかにし、その当時の人々が気候変動に対してどのように応答したのかを歴史・考古学者と協同して解明するため、お寺などの古い建物に使われていた木材や、遺跡から出てきた木材を使って研究を進めている。

6 研…東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティーの向上（代表…石川智士）

渡辺一生

農学、地理情報学（地域研究）

タイ、ラオス、インドネシアおよびフィリピンを中心に、地域の社会・経済的変化と生態資源利用の相互関係について文理融合研究を実施している。加えて、地域資源の利用とケアの両立を図るために必要な要件を整理した「エリアケイパビリティー」概念の構築を進めている。

研究基盤国際センター…コミュニケーション部門

三村 豊

建築史・都市史

建築・都市史を中心に画像処理やGISを用いて研究に従事する。主にインドネシア・ジャカルタ都市圏を対象に、時系列の都市の情報基盤構築を行う。ジャカルタ都市圏は、都市（コタ…kota）でもありかつ村落（デサ…desa）であるような地域（Desakota）が広域都市圏を形成しており、そうした都市構造が環境への負荷を軽減している可能性がある。都市の中の「隠された智慧」を古地図や地理情報をもとに明らかにする研究を行っている。

フィールドぶらり4「ザンビア南部」  
フィールドでまなぶ・みんなで考える  
ザンビア南部の農と食と暮らし

2017年3月発行

編者 地球研若手研究員プロジェクト編  
発行 総合地球環境学研究所

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4  
Tel.075-707-2100 (代表)  
Fax.075-707-2106 (代表)  
<http://www.chikyuu.ac.jp/>

編集 三村豊・宮壽英寿  
デザイン 木村幸央  
印刷・製本 株式会社グラフィック  
ISBN 978-4-906888-45-0



